

# 『はくぶつかん』にみる昭和50年代前半の 東大阪市立郷土博物館（上）

長谷洋一

東大阪市立郷土博物館は、生駒西麓にある山畑古墳群の一角に建ち、昭和47年12月1日に開館した。同館は大阪府の市町村(大阪市を除く)で最も早く開設された市立歴史博物館である。展示場は小展示室(110㎡)と大展示室(255㎡)の2室からなり、主な展示資料としては市内各遺跡からの出土資料や河内木綿の下機<sup>しもはた</sup>や旧大和川筋を往来していた井路川船などの民俗資料などが中心である。

筆者の手元には、東大阪市立郷土博物館が発行した『はくぶつかん』1号から19・20合併号までが揃っている。『はくぶつかん』は、昭和50年5月からほぼ隔月に発行・配布された市民向けのパンフレットで、B4版のわら半紙に、ボールペン原紙による謄写版で印刷したものを半分に折り、端をホッチキスで留めた数頁からなる刊行物である。内容は今日、各博物館が発行する「博物館だより」「年報」に近く、加えて館員の活躍や苦悩、同館を取り巻く諸事情がつぶさに綴られており、等身大の博物館の姿が投影されている。そこで、『はくぶつかん』を通して昭和50年代前半の東大阪市立郷土博物館についてみてみたい。

博物館設置の計画は昭和43年頃から地元有志から持ち上がり、博物館施設は篤志家の援助、協力によって昭和47年6月に完成した。8月に

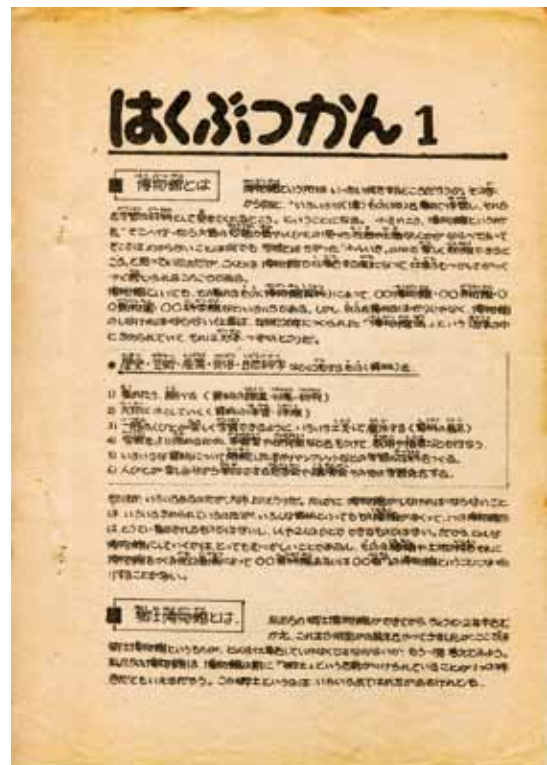


東大阪市立郷土博物館（現在）

は市役所（東支所）内に博物館開設準備室が設置され、11月下旬にはスタッフが博物館へ移りオープンを迎えた。開館記念展として「古墳—その社会と変遷—」（昭和47年12月1日～昭和48年3月10日）、特別展「古代の河内—河内に生きる人びと—」（昭和48年3月21日～6月10日）が開催された。

昭和48年7月以降は、常設展「東大阪市の年輪」を軸に、年1回の特別展が開催される。当時のスタッフは館長以下学芸員補3名を含む5名で、準備室の設置からわずか4ヶ月で開館、2本の特別展が連続して開催された。

さて、昭和50年5月1日に『はくぶつかん』1号が発行された。内容は、特集記事である「博物館とは」「郷土博物館とは」のほかに「博物館の台所」「博物館の主な活動」「河内の史跡をたずねて その1 博物館の周辺」「常設展示資料の紹介」「編集後記」からなる。編集後記では、「小さな博物館のより 重大な使命を目標にが



『はくぶつかん』1号



『はくぶつかん』 8号

んばって行きたいと思います。このため皆様方(ママ)の絶大なるご協力みなさまがたを賜わりたいと思います」と結んでいる。2号(同7月)からはこれに「河内かわらばん」と題した枚方市から河内長野市までについての歴史や文化に関する日記風記事が加わる。また3号(同9月)からは冒頭のタイトル下に特集記事に関する図面や地図、イラストを添えて表紙としている。

4号(同11月)では、「郷土博物館一開館3年目をふりかえって」の記事が組まれた。施設自体は十分な議論を経て建設された反面、博物館の質を作る各種資料・情報の収集や組織的な調査研究など基本的運営方針の検討を「公立博物館の地域での使命という十分な認識の上に立って行わず、そのままスタートさせた」ことや、館の運営が内部的な消化不良をおこしながら市民サービスと普及啓蒙の唯一の手段となってしまう特別展示を例年実施し、平常の館の質的向上、積極的な地域住民への働きかけに繋がらなかったことなどが反省点として挙げられている。

『はくぶつかん』もこうした反省にたって発行されたものと思われる。

特集記事は、考古学関係を中心に組まれたが、それだけではなく、大和川(6号・昭和51年3

月)や大和川の付替え(7号・同5月)など河内地方に関係するテーマのほか、ひなまつりとひな人形(6号)や寄贈資料の万葉植物(8号・同5月)、博物館周辺に現れるホンドリズ(10号・同12月)なども扱われバラエティに富んでいる。「郷土ということばには歴史・文化にとどまらず自然や風土そのほかあらゆるものが1つとなって郷土をつくりあげている」(1号)ことを具体的に示した内容となっている。

当時、展示事業以外に「はくぶつかん郷土史講座」(年6回)、親と子の史跡見学会(春・秋)、「はくぶつかん考古学教室」(年6回)が計画され、8号からは館員と共に郷土について学ぶ「はくぶつかん学習グループ」の募集を行っており、次号では中学・高校生による「河内考古学研究サークル」の発足が報じられている。こうした努力もあって9号(同10月)では発行部数500部の『はくぶつかん』1号～8号までの在庫がなくなったことを記している。

しかし人員と予算の問題は長く館員を悩ませる問題として報じられている。昭和50年度予算は890万円で、予算の約8割が「清掃・警備」「管理維持(光熱費)」に充てられて(1号)展示用予算が厳しいなか、7号では「さらに苦しかった台所」として、昭和51年度予算が前年比34%減の567.7万円となり、特別展示経費がゼロとなったことを伝えている。当時、ドルショック・オイルショックの影響を受けて市財政も低迷していた時期であった。

さらに10号では10月に専門職員(内館長兼職)2名が退職し、文化財課課長代理が博物館館長を兼務し、常勤スタッフが専門職員2、事務職員1という体制となっていた。

現在博物館で発行される「博物館だより」などでも、ここまで館員の本音や館の実情が市民向けに公表されている事例は稀であろう。『はくぶつかん』に綴られた平常展示の重要性や地域住民との交流、各種事業の多彩な展開、博物館をめぐる人員と予算の問題など、博物館を取り巻く諸事情は、40年を隔てた今日ですらあまり変わっていないように思えるのである。(続)

博物館長 文学部教授